



第1章

ぎふ長良川の鵜飼



1 風雅1300年、今に伝える感動絵巻

ぎふ長良川の鵜飼は古典漁法を今に伝える岐阜市の夏の風物詩。その歴史は古く、1300年以上前にまでさかのぼることができる。織田信長や徳川家康など時の権力者たちの保護を受け、俳聖・松尾芭蕉も「おもしろうてやがてかなしき鵜舟かな」という有名な一句を残している。また、昭和11（1936）年と昭和36（1961）年の2度にわたり、喜劇王チャールズ・チャップリンも見学のために来岐。鵜匠^{うしやう}をアーティストと賞賛し「ワンドフル」を連発したといわれている。



ぎふ長良川の鵜飼

鵜飼は鵜匠が鵜を操り魚を捕る日本の伝統漁法。ぎふ長良川の鵜飼では、最大12羽の鵜を見事な手^た縄^{なわ}さばきで操り、次々に鮎^{あゆ}などを捕る。鵜匠は代々受け継がれ、常日頃から鵜と一緒に生活しているので、鵜匠と鵜は呼吸の合った動きを見せる。暗闇に満ちた水面に篝火^{かがりび}を焚いた鵜舟^{たふね}がゆっくりと現れ、鵜匠の掛け声のもと、一斉に鵜が鮎を捕らえる。目の前で、勇壮な歴史絵巻が繰り広げられ、観る人を幽玄^{ゆうげん}の世界へと誘う。

平成25（2013）年5月23日に鵜飼観覧船乗船客数が統計をとりはじめた昭和40（1965）年からの累計で、1000万人を突破した。

鵜飼の歴史

日本における鵜飼の歴史はきわめて古く、日本書紀、古事記にもその記述が見られる。長良川の鵜飼は1300年以上前（西暦702年の史料より）から行われてきた。長良川では、「鵜匠^{あゆずし}」という地位を与えたという織田信長や、鮎鮠^{あゆずし}を好み江戸城へ献上させた徳川家康など、時の権力者に保護され、川のいろいろな権限を与えられ、かつては21人の鵜匠がいたといわれている。明治23（1890）年から、宮内省（現在の宮内庁）に属し、現在に至る。鵜匠は代々受け継がれ、岐阜市には6人、関市には3人おり、正式な職名を宮内庁式部職^{くわいしやうしきぶしやく}鵜匠^{うしやう}という。



なお、鵜匠が「ハウハウ」と鵜を励ます声と、とも乗り・なか乗りが舟縁を「ドンドン」とたたく音は、平成8（1996）年に環境庁（現在の環境省）の「残したい日本の音風景100選」に選定された。

また、鵜匠は御料場^{ごりやうば}と呼ばれる古津地区^{ふるつ}（一般には禁漁区）で年8回御料鵜飼を行い、捕れた鮎を宮内庁に納めている。この御料鵜飼は、漁のみで観覧客のいない御料鵜飼と外交団接遇鵜飼の2種類に分けることができる。外交団接遇鵜飼では、毎年、宮内庁が招待した、多くの駐日外国大使・公使夫妻などが参加し、鵜飼観覧を行う。「長良川鵜飼用具」一式122点は国の重要有形民俗文化財に、「長良川の鵜飼漁の技術」は国の重要無形民俗文化財に指定されている。

鵜匠の装束

漁服

黒または紺色の木綿^{もめん}でできている。

胸あて

火の粉や松ヤニの油をよけ、また、ポケットになる。

腰蓑

ワラ製で、水しぶきを払い、身体が冷えるのを防ぐ。



風折烏帽子

黒または紺色の麻布で頭にまきつけて篝火から頭を守る。

足半

魚の脂や水あかで滑らないよう、普通のゾウリの半分の長さでできている。

鵜舟

鵜舟は全長約13mで、鵜匠のほかに助手の「なか乗り」と舟の舵をとる「とも乗り」を加えた3人1組で構成されている。

- 篝^{かがり} 火^び 鵜飼の照明。
- 篝^{かがり} 篝^{かご} 篝火を燃やす鉄製の籠。
- 篝^{かがり} 棒^{ぼう} 篝をぶら下げるための棒。
- 松^{まつ} 割^{わり} 木^き 照明用に使う松の割木。
- 手^た 縄^{なわ} 鵜を操るときに使う縄。鵜匠は10～12本を同時に操る。
- とも乗り 鵜舟を操縦する責任者。
- なか乗り 鵜匠、とも乗りの助手。

ぎふ長良川の鵜飼で使用する鵜

ぎふ長良川の鵜飼で使う鵜は渡り鳥で、野生の海鵜^{うみう}を茨城県日立市十王町^{たちしじゅうおうちょう}で捕獲する。鵜匠は鵜と生活をともにし、2、3年かけて訓練し、1人前の鵜に育て上げる。体長は80cmから90cmで、学習能力が高く、新しい環境に順応しやすい性格。鵜が捕らえた鮎^はには、鵜の食み跡^{あと}が残っており、珍重されている。



屋号

鵜匠6人にはそれぞれ屋号があり、鵜飼に使用する道具にはその屋号が入っている。

杉山 ^{まさひこ} 雅彦鵜匠	マルワ	㊦	山下 ^{てつじ} 哲司鵜匠	マルヤマ	㊱
杉山 ^{よしのり} 喜規鵜匠	ヤマジョウ	全	杉山 ^{しゅうじ} 秀二鵜匠	マルヨ	㊲
杉山 ^{ひでたか} 英孝鵜匠	ワチガイ	㊰	山下 ^{てるまさ} 晃正鵜匠	マルイチ	㊱

漁の流れ

① 鵜の選択

鵜匠^{うしやう}は鵜の体調を考慮し、その日出漁する鵜を最大12羽毎日選ぶ。

② 鵜舟の準備

篝火^{かがりび}の薪^{まき}となる松割木、獲った鮎^{あじ}を吐^はかせる吐籠^{はけかご}など鵜飼に必要な道具を舟に積み込む。また、簀^{すい}を吊るす簀棒^{すいぼう}は、樹液でスムーズに動かすため、ムクゲの枝葉を一緒に差し込む。

③ 鵜を舟に

鵜舟の準備が済むと鵜籠に入った鵜を舟に乗せる。

④ まわし場へ

漁の準備をする上流へと鵜舟を走らせる。

⑤ 日没を待つ

日没までたき火を囲んで待つ。

⑥ くじ引き

毎日6隻^{せき}の出漁順をくじ引きで決める。



⑦ 鵜飼の開始

①鵜籠から鵜を1羽ずつ取り出し、鵜の状態を見ながら鵜匠^{うしやう}が手縄^{たなわ}を付ける。その先端は2本に分かれており、鵜の首に「首結い」を腹に「腹掛け」を結ぶ。

②篝火^{かがりび}がともされ、出漁。



⑧ あがり

仕事を終えた鵜を、1羽ずつ舳先^{へさき}の舟縁^{ふなべり}にあげる。鵜匠は鵜の状態を確かめながら、順番に手縄をはずす。



鵜飼観覧の流れ

① 受付

鵜飼観覧船事務所窓口にて受付を済ませ、乗船券を受け取る。

② 鵜飼説明

午後5時45分から鵜飼観覧船のりばにて、鵜匠による鵜飼説明がある。本物の鵜を使用した漁の方法や鵜飼の歴史について聞くことができる（御料鵜飼、花火大会の日は鵜飼説明なし）。



③ 乗船

乗船券に記載されている船名の観覧船へ乗る。

④ 出船

鵜飼観覧船が出船し、鵜飼観覧ポイントへ向う。川を上る途中、長良川や金華山の風景を楽しむことができる。

⑤ 川岸に停泊

鵜飼が始まるまでの時間を、食事・宴会などで楽しむ。

⑥ 鵜飼開始

午後7時45分頃に夜空に打ちあがる花火は、漁の開始を告げる合図。いよいよ鵜飼本番。

⑦ 狩り下り

観覧船が鵜舟1隻と併走して川を下る。鵜匠の手縄さばきや鵜が鮎を捕らえる様子を間近で見ることができる。

※天候や川の状況により、「つけ見せ（川岸に係留したままの観覧船からの鵜飼観覧）」になる場合もある。



⑧ 総がらみ

鵜舟6隻が川幅いっぱいに横隊となり、一斉に鮎を浅瀬に追い込む鵜飼のクライマックス。



⑨ 下船

余韻を楽しみながら下船する。（各時間は当日の天候や船数、イベント等によって前後する。）

■ぎふ長良川の鵜飼開催データ

※令和8年9月現在

開催期間		5月11日～10月15日 ただし、鵜飼休み及び増水などで鵜飼ができない日は中止。
住所		岐阜市湊町1-2 鵜飼観覧船のりば
鵜飼開始時間		19時45分頃（時季やイベントにより変動あり。） ※納涼鵜飼（7月中旬から9月の土曜日に多く設定される）は2回制で鵜飼が行われており、1回目の開始時刻は19時30分、2回目の開始時刻は21時10分頃。 ※御料鵜飼（年8回）の日は、20時30分から鵜飼開始。
観覧船 出船時間	乗合船	18時15分、18時45分、19時15分
	貸切船	17時30分～19時15分のご希望の時間
料金	乗合船	大人4,200円、小人2,100円 繁忙日：大人5,100円、小人2,600円 ※金額は消費税込み ※大人は中学生以上、小人は3歳以上小学生以下 ※修学旅行は、1人1,800円、繁忙日：2,200円 ※全船舶内禁煙
	貸切船	通常乗船定員 50人乗り：178,500円 繁忙日：216,800円 40人乗り：142,800円 繁忙日：173,400円 30人乗り：107,100円 繁忙日：130,100円 20人乗り：71,400円 繁忙日：86,700円 15人乗り：53,600円 繁忙日：65,100円 24人乗り（椅子席）：107,100円 繁忙日：130,100円 16人乗り（椅子席）：71,400円 繁忙日：86,700円 高級船（15人乗り）：160,700円 繁忙日：195,100円 高級船（10人乗り）：107,100円 繁忙日：130,100円 ※金額は消費税込み ※全船舶内禁煙
駐車場		岐阜公園堤外 ^{ていがい} 駐車場 1回310円
申込・問い合わせ		岐阜市鵜飼観覧船事務所 TEL 058-262-0104 HP: https://www.ukai-gifu-city.jp

トピックス

高級観覧船運航開始

令和4（2022）年5月より高級観覧船3隻の運航を開始した。3隻それぞれが異なるテーマカラーを持ち、闇の中に光る青白い月の光をテーマカラーとした「白月」、闇夜にたたずむ金華山の深い黒や、川面の深いブルー、鵜匠が身に着ける装束の色をイメージした「藍山」、篝火の色をモチーフとした「花篝」がある。3隻とも貸切専用。

船名	定員
白月	10人
藍山	15人
花篝	



高級観覧船 藍山

岐阜プレミアム観覧船

令和8（2026）年8月から、「日本一贅沢な川遊び」をコンセプトに、インダストリアルデザイナーの水戸岡鋭治氏がデザインした、「GIFU PREMIUM 観覧船」の運航が開始された。



うーたん

「ぎふ長良川の鵜飼」のPRを行うマスコットキャラクターとして平成3（1991）年に誕生した。鵜に鵜匠の格好をさせることで、鵜と鵜匠の呼吸が一つであることを表現している。

平成24（2012）年8月1日付けで岐阜市から特別住民票が交付された。



2 鵜飼関連の散策スポット

ぎふ長良川の鵜飼が行われる周辺地域は、「長良川うかいミュージアム」や「岐阜市鵜飼観覧船造船所」など鵜飼に関する施設やみどころでいっぱい。これらを散策することで鵜飼について理解を深めることができる。



長良川うかいミュージアム



岐阜市鵜飼観覧船事務所

鵜飼を船に乗って楽しむ際、この事務所で乗合船や貸切船の予約ができる。平成21（2009）年5月に、川原町の景観、傍らの川灯台ともマッチする外観にリニューアルし、まちなみに連続性をもたせ、歴史的景観の創出を図っている。



鵜飼観覧船待合所

鵜飼観覧船乗船までの待ち時間を過ごせるよう、岐阜市鵜飼観覧船事務所の正面（道向かい）にある。平成21（2009）年5月に、川原町の歴史的景観にあわせて新築した。乗船客だけでなく、「まちなか歩き」を楽しむ人も1年を通して利用できる施設として、バリアフリー化・休憩スペースの拡充（1階・2階）・大型テレビ導入による鵜飼の情報発信など機能充実を図っている。



鵜飼観覧船のりば

鵜飼観覧船のりばは、長良橋南詰を下流側に降りた所にある。岐阜市鵜飼観覧船事務所のすぐ下がのりばとなっている。午後5時45分からは鵜匠による鵜飼の説明が行われ、観覧客の好評を得ている。
※御料鵜飼、花火大会の日は鵜飼説明なし。



🎓 ポケットパーク「鵜かがり」と鵜匠像のモニュメント

昭和56（1981）年、岐阜市初のポケットパークとして造られた。ポケットパークは、俳人・河東碧梧桐^{かわりがしへき ごとう}の鵜飼にゆかりのある句碑もある眺めのよいミニ公園で、観光客の休憩やくつろぎの場として、また、市民のふれあいの場として利用されている。また橋のたもとには、鵜飼観覧船のりばや待合所があり、鵜飼の世界への入口となっている。

鵜匠像は、令和5年5月10日にポケットパークから岐阜市鵜飼観覧船事務所前に移設され、フォトスポットとして人気を博している。



🎓 鵜飼の里

長良川右岸から一步入ったところに鵜匠たちの家が並び、^{とや}鳥屋で20羽程度の鵜の世話をし、ともに暮らしている。庭先に積みあげられた薪や鵜を道沿いから見るができる。



🎓 長良川うかいミュージアム（岐阜市長良川鵜飼伝承館）

岐阜市を代表する伝統文化である「ぎふ長良川の鵜飼」を分かりやすく紹介する施設として、平成24（2012）年8月にオープンした。

館内には、ここにしかない絵巻物型スクリーンとリアルな音響・照明で、鵜飼を体感できるガイダンスシアターや、鵜の生態を楽しく学べる本物の約4倍サイズの鵜の模型、レストランなどがあり、季節や天候を問わずぎふ長良川の鵜飼を学ぶことができる。



平成23（2011）年に、公募により愛称が「長良川うかいミュージアム」に決定した。

■長良川うかいミュージアム（岐阜市長良川鵜飼伝承館）データ

開館時間	5月1日～10月15日 9時00分～19時00分（入館締切：18時30分） 10月16日～4月30日 9時00分～17時00分（入館締切：16時30分）
休館日	年末年始（12月29日～1月3日） 5月1日～10月15日 休館日なし（一部指定日除く） 10月16日～4月30日 毎週火曜日（祝日の場合は翌平日）
住所	岐阜市長良51番地2
展示室観覧料	大人（中学生を除く15歳以上）600円、小人（4歳以上15歳未満）300円 ※20人以上は団体割引 大人480円、小人240円
駐車場（有料）	一般車67台、身しょう者用2台、大型車6台

岐阜市鵜飼観覧船造船所

昔ながらの木造による鵜飼観覧船の造船所。観覧船には設計図面はなく、経験豊かな船大工の匠の技で建造されている。観覧船1隻の完成には約半年間かかり、1年間に最大2隻の船が造られる。また、造船所内には、鵜匠が実際に使用していた鵜舟も展示されている。



■ 鵜飼観覧船が完成するまで

① 船材は高野槨



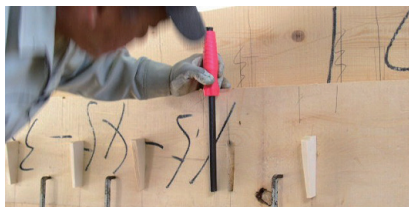
岐阜県の東濃から長野県の本曾にかけての天然木の中から、船材に最適な高野槨こうやまきのみを使用している。

② 製材



1本の槨材で8～9枚の板が取れる。

③ 釘打ち



槨材に船釘ふなくぎを打ち込み船底を造る。船釘にはぼうず釘ひらくぎ、平釘かさくぎ、傘釘の3種類があり、用途に合わせて使い分け、板をつなぎ合わせる。

④ 船底・船体



平らな板に石の重しを乗せてしならせ、反り上げていく。船体内部が完成するまでは、重しは乗せたまま。船底には樹脂を塗る。

⑤ 手摺り・屋形



船体内部を固定した後、手摺り・屋形てすやかたを製作する。

⑥ 進水式



完成した観覧船は進水式が行われ、鵜飼観覧船として活躍する。

●鮎供養と鵜供養

■鮎供養

鮎供養^{あゆくよう}は、毎年7月16日に長良川まつりとともに行われている。長良川^{かはん}河畔^{しんめいじんじゃ}の神明神社で鵜匠をはじめとした関係者による供養が行われた後、鮎の放流が行われる。



■鵜供養

ぎふ長良川の鵜飼で活躍し、天命が尽きた鵜の供養と鵜飼発展の祈願のために毎年、ぎふ長良川の鵜飼終了後の最初の日曜日に、鵜匠をはじめとした関係者により鵜塚にて営まれる。法要後は、長良川河畔に移動し、鵜や長良川への思いを詠んだ俳句の短冊を川面に流して鵜^{めいふく}の冥福を祈る。



長良大前町1丁目にある鵜塚

●長良川の鵜飼について記述されている古文書

長良川の鵜飼の様子について書物で確認できるのは室町時代以降である。代表的なものとしては、「藤川^{ふじかわ}の記^き」、「甲陽軍鑑^{こうようぐんかん}」などである。

■「藤川の記」

文明5(1473)年に前関白太政大臣で文化人でもある一条兼良^{いちじょうかねよし}の旅行記。美濃を訪れた際に鵜飼見物を楽しんだことが書かれている。

■「甲陽軍鑑」

永禄11(1568)年に織田信長が武田信玄の使者に鵜飼を見せて接待したと記載されている。この時、信長は鮎を自ら選んで、土産として手渡したとされる。